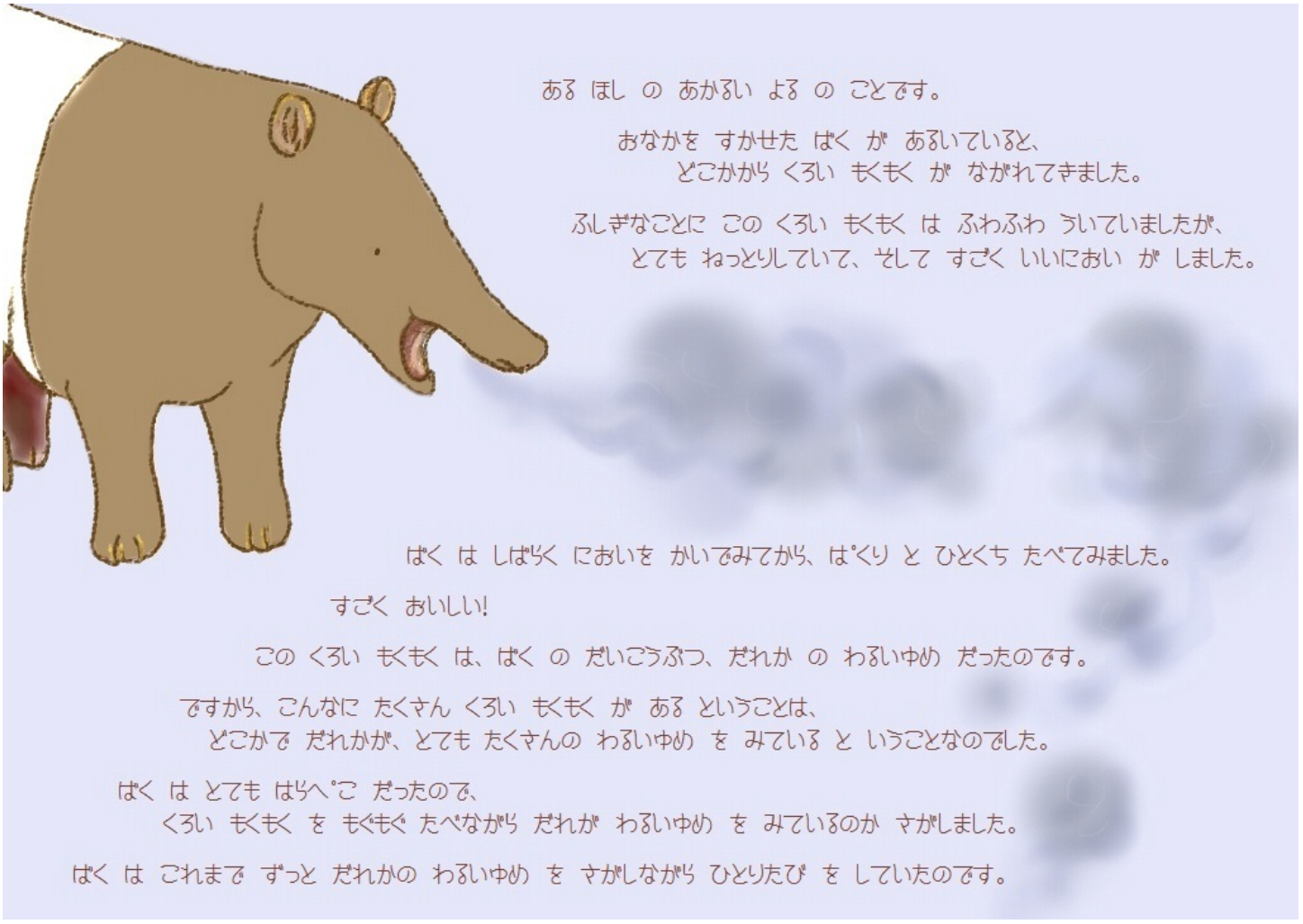
ばく と かたつむり

さく：たつた
え：きむろみ



ある ほし の あかるい よる の ことです。

おなかを すかせた ばく が あるいていると、
どこかから くろい もくもく が ながれてきました。

ふしぎなことに この くろい もくもく は ふわふわ ういていましたが、
とても ねっとりしていて、そして すごく いいにおい が しました。

ばく は しばらく においを かいでみてから、は゜くり と ひとくち たべてみました。

すごく おいしい!

この くろい もくもく は、ばく の だいごうぶつ、だれか の わるいゆめ だったのです。

ですから、こんなに たくさん くろい もくもく が ある ということは、
どこかで だれかが、とても たくさんの わるいゆめ を みている と いうことなのでした。

ばく は とても はらへ゜こ だったので、
くろい もくもく を もぐもぐ たべながら だれが わるいゆめ を みているのか さがしました。

ばく は これまで ずっと だれかの わるいゆめ を さがしながら ひとりたび を していたのです。

ばく は やっと みつけた わるいゆめ を ばくばく たべながら、キャベツばたけ に どんどん はいって いきました。

ごろごろ ごろがっている キャベツ を じょうずに よけて あるいて いくと、
ついに くろい もくもく が おおきな キャベツ から でてくるのに であいました。

ばく は くろい もくもく の かたまり を ごくん と のみこみながら キャベツ を のぞきこみました。

すると キャベツ の はっぱ の かげで、1ひき の かたつむり が しくしく なきながら ねていました。

どうやら わるいゆめ を みているのは、
この かたつむり です。

かたつむり の からの中 からは
くろい もくもく が むくむく と わきでていました。

ばく は えんりょせずに かたつむり の わるいゆめ を どんどん たべました。
でも ばく が たべても たべても くろい もくもくは へりません。

かわいそうな かたつむり は よる の あいだ ずっと から に とじこもって わるいゆめ を みていたのです。

ばく は とうとう おなかいっぱい に なってしまいました。

それでも かたつむり は わるいゆめ から めざめません。
ばく は こまってしまいました。

そして、まだ ぽろぽろ なみだ を こぼしながら ねむっている かたつむり を こつん と けって おこしました。

かたつむり は ころころ ころがってから、そっと からの中 から かお を だしました。

「 こんばんは、かたつむり。どうして そんなに わるいゆめ ばっかり みているの? 」
「 こんばんは、ばくさん。どうしてだか わたしにも わかりません 」

かたつむり は ちいさな こえで こたえました。

「 なんだか とても かなしくって つらいんです。うまれてから ずっと。
おしゃべりしたり、ごはんを いっしょに たべたりするあいてが いないこと。
あるくのが とっても おそいこと。
いつ しんでしまうか わからないこと。

ぜんいん は たくさん あるみたいですが、
どれも ぴったり しない きが します。

いろいろ かんがえはじめると
こわくて なかなか ねむれません。

やっと ねむれても わるいゆめばかり みます。

おほしさま の ひかり さえ さみしいです 」

ぼく は よぞら を みあげて みましたが、ほし は きらきら と うつくしく ひかるばかりで、
かたつむり の いっていることは さっぱり わかりませんでした。

「 きみの いうことは ぼくには よくわからないよ 」

ぼく は しょうじきに いいました。

「 でも、もうちょっと したら わかるかもしれない。もうちょっと いっしょに いても いいかなあ 」

かたつむり は おどろいたようでしたが、ちいさなこえで 「 もちろんです 」 と いいました。

そこで、ぼく は キャベツの となりに すわりこみ、2ひき は ならんで よぞら を みあげました。

ほし は あいかわらず かがやきながら、ゆっくり うごいて いきました。
ぼく が たいくつして はなしかけると、かたつむり は ちいさなこえで へんじ しました。 かたつむり は ものしり でした。

ぼく は かたつむり と しゃべるのが とても たのしかったのですが、おなかが いっぱいで つかれていたので、
そのうち ねむりこんで しまいました。

そして、はっきりと おぼえていないけれど、ゆめ を みたようでした。

これは とても めずらしいことでした。

ほかのひとの わるいゆめ を たべる ぼく は、
いつも じぶんでは ゆめ を みないからです。

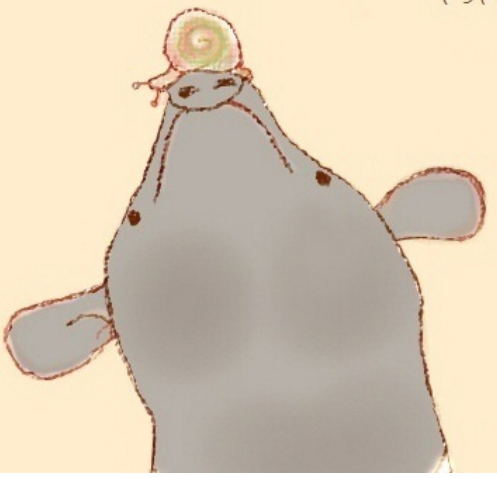
「 ばくさん、ばくさん 」

ちいさな こえ に よばれて めを さました ばく は、
なんだか くらくて つめたい ばしょ に ずっと ひとりで いたような きが しました。

ほんとうは まったく そんなことは なく、
あたたかな おひさま が ばく を ぽかぽか と あたためて いました。
もう おひる に なっていたのです。

ばく は おきあがると あおぞら を みあげて、それから いちめん の キャベツばたけ を みまわしました。
そして、ばく を おこすために、
ばく の 耳 の そば の キャベツ の はっぱ の うえに でてきた かたつむり を みました。

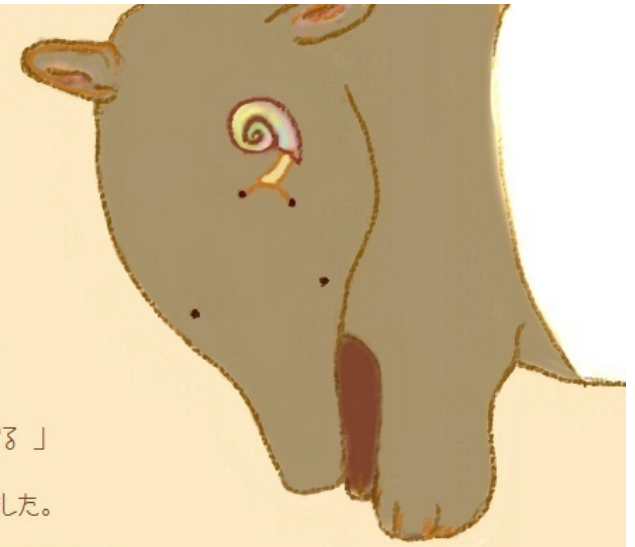
かたつむり は とても ちいさくて、そして やっぱり とても かなしそうでした。



さっきの わるいゆめ は、かたつむり の わるいゆめ だったんだろうか
と ばく は おもいました。

「 やっぱり ぼくには きみの いったことが
よく わからなかったよ。

でも、なんでか わからないけれど、
きみの かなしいこと つらいこと ぜんぶ
わかって あげられたらなあ って おもうよ 」



それから、ぼく は おそるおそる いいました。

「 だから ぼくと いっしょに こない?

きみが あるくのが おそくても、ぼくが のりものに なってあげるし、
ぼくは きみと はなしてて おもしろかったよ。

ぼくたちは たべるものが ちがうから、
いっしょに ごはんは たべられないかも しれないけれど、
きみが わるいゆめ を みたときは、ぼくが いつでも たべてあげる 」

かたつむり は とても おどろいて、からの中に もぐりこんで しまいました。

でも、ぼく が しばらく まっていると、かたつむり は そろそろ と でてきました。

そして さっきより もっと ちいさな こえで

「 ぜひ おねがいします 」
と こたえました。

そこで ぼく が キャベツ の はっぱ に あたま を ちかづけると、
かたつむり は ゆっくり と キャベツから ぼく に のりうつりました。

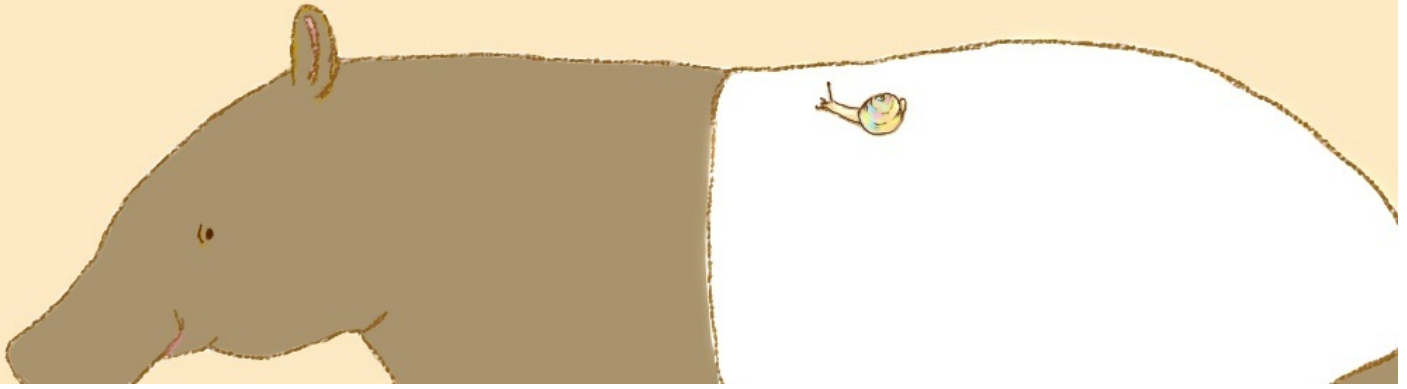
こうして 2ひき は いっしょに でかけました。

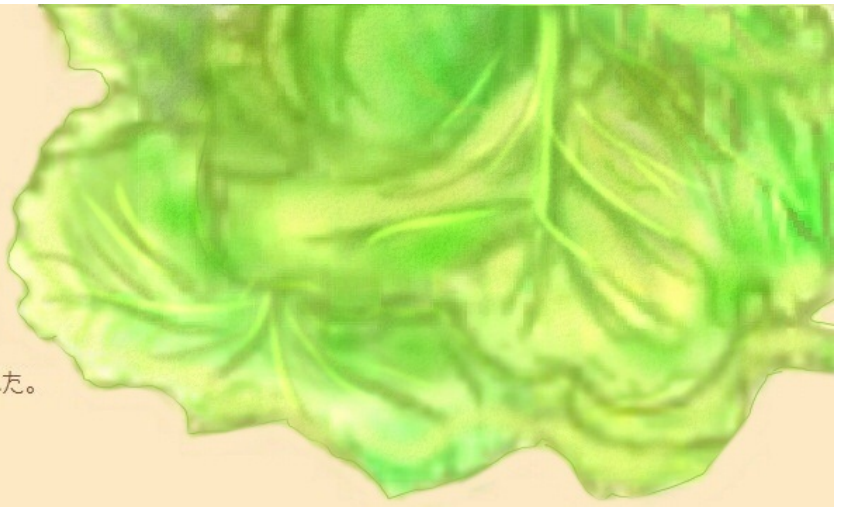
ぱく は かたつむり を のせて いろいろな ところに いきました。
かたつむり は ぱく の 耳の そばで いろいろな こと を おしえて くれました。

かたつむり の はなし は むずかしいことも おおかったのですが、やくに たつこと ばかりでした。
ぱく は かたつむり の はなし を きくのが たのしみ でした。

2ひき は たくさん おしゃべりしましたが、
ぱく は かたつむり が なぜ そんなに かなしいのか わからないままでした。

けれど、かたつむり が わるいゆめ を みると、ぱく は せっせと それ を たべました。





ずっと たびを つづけて、
ずいぶん とおいところ まで やってきた あるひ、

ばく と かたつむり は
べつの キャベツばたけ の よこ を とおりかかりました。

「 ばくさん、これまで ありがとう ございました。
ちょっと ここで やすみませんか 」

かたつむり は あいかわらず ちいさな こえで いいました。

「 しばらく ひとりに なりたいんです 」

かたつむり が そんなことを いうのは、はじめてでした。

ばく は、かたつむり を いちばん あおあおとして りっぱな キャベツの うえに おろしてやりました。

「 ほんとうに ありがとう 」

かたつむり は いつもより ちいさな こえで そういうと、キャベツの はっぱ の うえを ゆっくりと はっていきました。

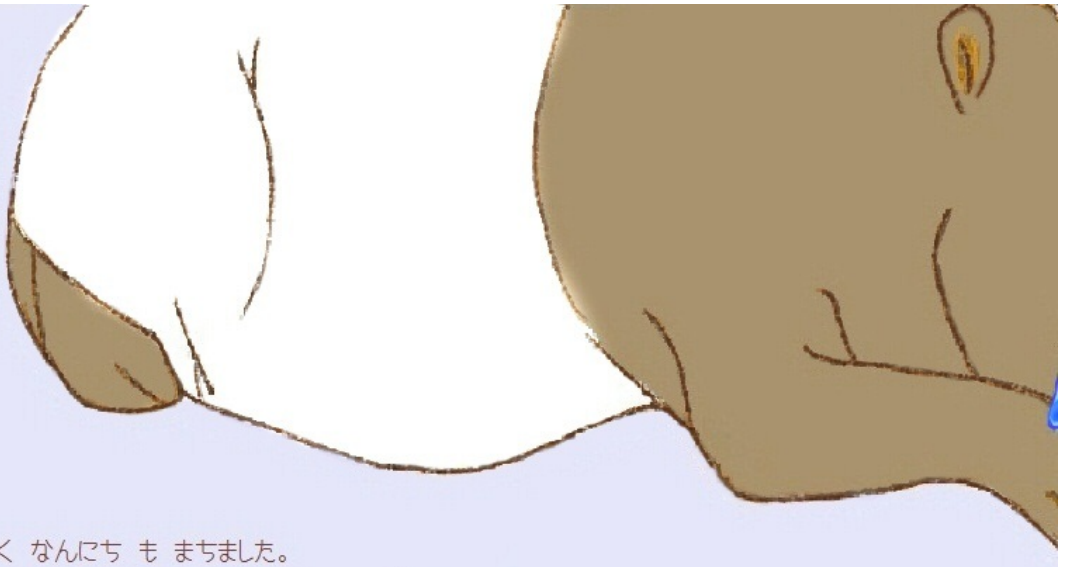
ぱく は しばらく ちょうちょ を おいかけたりして あそびました。
ときどき かたつむり の ようすを みにいきましたが、かたつむり は ずっと からの中で やすんでいるようでした。

つかれて ねむっているのだろう と ぱく は そっと しておきましたが、
かたつむり が わるいゆめ を みないなんて、ほんとうに めずらしい とも おもいました。

とうとう ゆうがた に なったので、
ぱく は かたつむり を おこそうとしましたが、
かたつむり は へんじを しませんでした。

これまで いつも たべていた
かたつむり の わるいゆめ が ないので、
おなかのすいた ぱく は
ほかの わるいゆめ を
さがしに いかなくては なりませんでした。

ぱく は つぎのひ の あさ に なってから
キャベツばたけ に もどりましたが、
かたつむり は まだ からの中に とじこもって いました。



それから ぼく は しんぼうづよく なんにち も まちました。

けれど、かたつむり は ぼく が どれほど よんでも でてきませんでした。

ついに ぼく は、かたつむり の から を そっと ひっくりかえしてみました。

すると、から は からっぽ でした。

かたつむり も、かたつむり の かなしみ も どこに いってしまったのか、ぼく には わかりませんでした。

ぼく は かたつむり の から を そっと もちあげると、キャベツばたけ を あとにしました。

ばく は また ひとりで たび を つづけました。

でも、ときどき、かたつむり が もどってきていないか と、からの中 を のぞきこみました。

やっぱり かたつむり は いませんでした。

それから また、ばく は かたつむり の こえ が きこえないかと、から を 耳に あててみました。

でも やっぱり かたつむり の こえ は きこえませんでした。

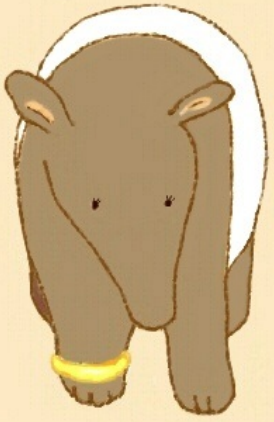
しかも あるひ、かたつむり の から は ばく の 耳に すっぽり はまりこんでしまいました。

ばく は とても こまりましたが、なにを やっても 耳から とりだすことが できません。

ばく は とうとう つかれはてて ねむってしまいました。

そして、ひさしぶりに ゆめ を みました。

「 ねえ、おきて 」



ばく は やさしく よばれて めが さめました。

おきた ばく は まっさきに かたつむり を さがしました。

でも、ばく の めのまえ に いたのは、
ちいさな かたつむり ではなく、
ばく と おなじぐらいの おおきさの ばくのおんなのこ でした。

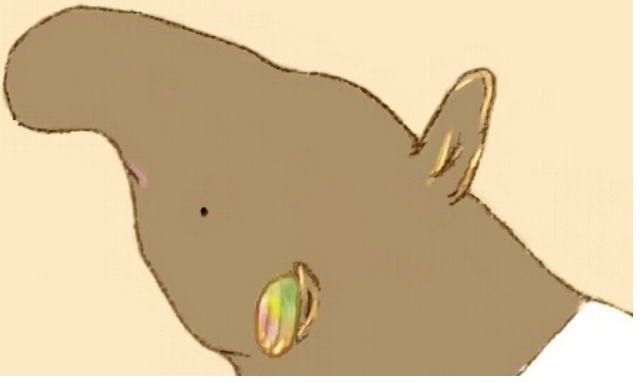
「 ごめんなさい。おなかが いっぱいで、あなたの わるいゆめ を たべられないの 」

ばくのおんなのこ は ばく に あやまりました。

「 あなたは どうして そんなに わるいゆめ ばかり みているの? 」

「 耳が つまって いたいんだ 」

ばく が こたえると、
ばくのおんなのこ は ばく の 耳を のぞきこみました。



そして、じょうずに ぱく の 耳から かたつむり の から を とりだしてくれました。

「 どうして あなたは こんなものを 耳に つめていたの？ 」

ぱくのおんなのこ は かたつむり の から を みて ふしぎそうに ききました。

「 これは ぼくの ともだちの かたつむり の から なんだ 」

ぱく は そういって、ぱくのおんなのこ に かたつむり の はなし を しました。

それから ためいきを ついて いいました。

「 ぼくは けっきょく さいごまで、かたつむり が どうして あんなに かなしかったのか わからなかったんだ 」

ばくのおんなのこ は ばく に かたつむり の から を かえしました。

「 わからなかったとしても、かたつむりさん は あなたが いっしょに いてくれて うれしかった と おもうわ 」

「 ほんとうに? 」

ばく は おもわず ききかえしました。

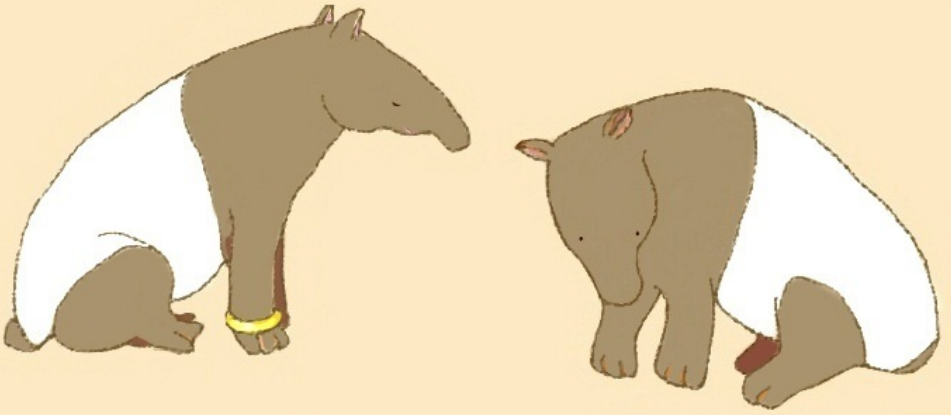
「 ええ。どんなに つらくて かなしくても、ともだち が いっしょに いてくれたら うれしいもの 」

ばく は よぞら を みあげました。

かたつむり と いっしょに みたときと おなじように、ほし は きらきら と うつくしく ひかっていました。

ばくのおんなのこ も ばく の となりで ほし を ながめて いましたが、しばらくしてから いいました。

「 あなたさえよければ、これから いっしょに たび を しましょう。そのうち あなたにも わかるでしょう 」



こうして、ばく は ばくのおんなのこ と いっしょに たび を することに なりました。

2ひき は とても とおくまで いっしょにあるきました。

おなかがすくと、だれかの わるいゆめ を みつけて、はんぶんずつ いっしょに たべました。

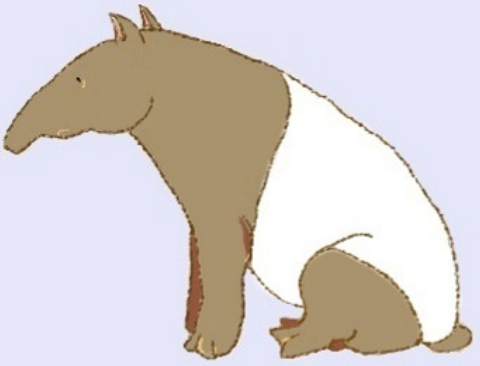
それから とても たくさん おしゃべり しました。

ばくのおんなのこ は ばく の しらなかったことを たくさん おしえてくれました。
ばく も、かたつむり が おしえてくれたことを こんどは ばくのおんなのこ に おしえました。

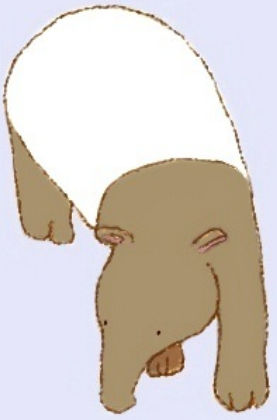
それでも、ばく は やっぱり ときどき かたつむり を おもいだしました。

そして かたつむり の から を とりだすと、さみしい きもちで ながめました。
それから、かたつむり が どうして そんなに かなしかったのか きこえてこないか と、から を 耳に あてました。

ばくのおんなのこ は ばく に なにも いいませんでしたが、ずっと ばく の そばに いました。



そして、
ある ほし の あかるい
よる の ことです。



ぱく は とつぜん、ぱくのおんなのこ の いったこと は ほんとうだった と きづいたのです。

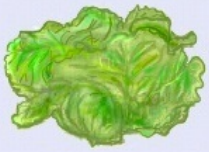
ぱく は この はっけん を ぱくのおんなのこ に はなそうと しましたが、
ぱくのおんなのこ は もう ねむっていました。

そこで、ぱく は あさ まで まつことにして、それまで ひとりで さんぽ することに しました。

ぱく は しばらく ぶらぶら と あるいていきました。

すると、ぱく と かたつむり が であったのに そっくりの キャベツばたけ に であいました。

ぱく は そっと はたけ に はいると、キャベツを ふまないように きをつけながら、
いちばん おおきな キャベツを さがしました。



やっと みつけた いちばん りっぱな キャベツまで、
ぱく と かたつむり が であったときの キャベツに そっくり でした。
ちがうのは、わるいゆめ を みている かたつむり が どこにも いない と いうことだけです。

ぱく は いつも もちあるいている かたつむり の から を とりだしました。

どんなに かたつむり の はなし を きいても、
から に 耳を すましても、
ぼく には かたつむり が どうして かなしかったのか
わからないままでした。

そして、ぼく の はなし を きいてくれる ぼくのおんなのこ にも、
ぼく が かたつむり に あえなくて
いま どんなに つらくて かなしいか わからないのでした。

ぼくのおんなのこ は かたつむり に あったことが ないのですから、どうぜんです。

それでも、ぼく は じぶんが つらいとき かなしいとき に
ぼくのおんなのこ が はなし を きいてくれて、そして いっしょに いてくれるだけで、
じゅうぶん うれしかったのです。

ぼく は さっき それに きが ついたのです。

ばく は、かたつむり も そうだったなら いいのに、と おもいました。
それから、きっと そうだ と おもいました。

どうして かなしいのか わからなくても、
ばく は かたつむり の ともだち だったからです。

もう、ばく が かたつむり の から に
耳を すます ひつようは ありませんでした。

ばく は かたつむり の から を
おおきな キャベツのはっぱ の かげに そっと おきました。

そして、あかるく なってきた そら の した、
ばくのおんなのこ の ところへと いそいで かえっていきました。

おしまい

ばくとかたつむり

http://p.booklog.jp/book/47198

文：立田　・　絵・きむろみ

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/47198

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/47198

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.